課題番号14

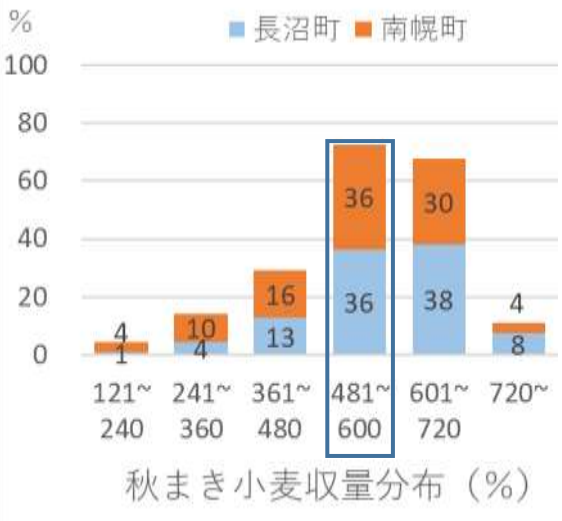
畑作物の生産性向上

～　秋まき小麦・大豆収量向上　～

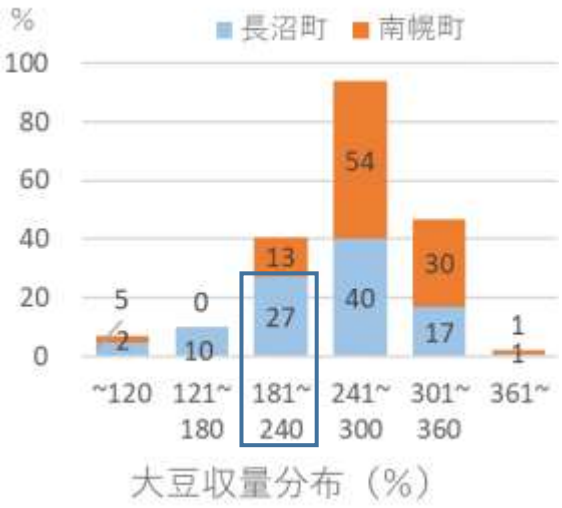
対象：長沼町秋まき小麦作付者７戸、南幌町秋まき小麦作付者４戸

１　活動の背景

令和５年度の転作率は長沼町86%、南幌町59%であり、土地利用型作物においては麦・大豆の収量性の影響は大きい。地域の秋まき小麦の収量分布率については480～600kg/10aの中間層が３～４割を占める。また、Ａ町の大豆は181～240kg/10aが３割程度占める。このことから秋まき小麦と大豆の中間層の収量向上を図ることを目的に農業者11戸を対象に活動を行った。



秋まき小麦収量分布（%）



大豆収量分布（%）

２　活動の経過

生育調査結果を実施してその結果に基づき秋まき小麦と大豆の基本技術である追肥量を提案し、農業者が提案内容を参考にして実施できるよう支援した。

長沼町
・秋まき小麦
・大豆

南幌町
・秋まき小麦

→

ほ場巡回
・生育調査
・ほ場の状況の確認
・病害虫発生状況の確認
・雑草発生状況の確認

→

技術提案
（個別巡回・ＦＡＸ情報）
秋まき小麦
・起生期、幼形期、止葉期の茎数に応じた追肥量

大豆
・根粒菌数に応じた追肥量

３　活動実績の具体的内容

秋まき小麦・大豆の基本技術の実施戸数（追肥提案の実施）
現況０戸→目標５戸→実績11戸

●秋まき小麦

町	農業者	前作	は種日		茎数（本/㎡）			穂数（本/㎡）	坪刈収量（kg/10a）	追肥提案
					起生期	幼形期	止葉期	成熟期		実施
長沼町	A	大豆	9月10日	間作	1,215	1,700	930	660	544	○
	B	大豆	9月9日	間作	1,645	1,530	1,210	740	455	○
	C	大豆 コーン	9月15日	ドリル	1,370	1,210	965	740	762	○
	D	大豆	10月13日	ドリル	583	1,360	1,459	908	664	○
	E	秋小	9/25~10/5	ドリル	1,416	1,040	1,368	848	761	○
	F	大豆	9月上	間作	1,240	1,260	938	855	616	○
	G	水稲 大豆	10/中	ドリル	304	720	720	520	583	○
南幌町	H	キャベツ 秋まき小麦	10月中	ドリル	232	568	1,016	928	302	○
	I	秋まき小麦 大豆 水稲	10月上	ドリル	496	1,000	1,136	576	666	○
	J	秋小 大豆	10月13日	ドリル	777	1,174	933	753	265	○
	K	秋小	9月24日	ドリル	1,080	1,774	910	784	664	○
	K	秋小後 水張り	10月17日	ドリル	240	586	711	624	235	○

要因①
大豆間作小麦で茎数が多くなりやすい

要因②
大豆収穫後の晩播きのため茎数不足

要因③
秋小収穫後の水張りで土壌の乾燥が遅れ晩播きになった

●大豆

町	農業者	前作	は種日	根粒菌数 粒/株	坪刈収量（kg/10a）	追肥提案 実施
長沼町	A	秋小	5月17日	28	439	○
	B	秋小	5月18日	8	432	○
	C	秋小	5/29～6/4	28	442	○
	D	水稲	5月26日	27	299	○
	E	秋小	5/25～5/28	26	372	○
	F	秋小	5/中	18	457	○
	G	秋小	5月30日	30	436	○

【秋まき小麦】
・追肥は提案した施用量を参考に実施されたが、坪刈り収量で600kg/10aを達成していない農業者も見られた。その要因として①大豆間作小麦で茎数が多くなりすぎた。②前作の大豆収穫や秋まき小麦のは種が共同作業のため、適期は種ができない。③大豆作付時の雑草が多く、大豆間作小麦ができないため、大豆収穫後の小麦のは種となってしまうなどが上げられた。

【大豆】
・追肥は提案した施用量を参考に実施された。坪刈り収量は300kg/10aを超えた。しかし雑草が多いほ場も見られた。

農業者の声

●「生育が数字になってわかりやすい」
●「ＦＡＸ情報参考にしているよ。
どんどん情報が欲しい」

４　今後の課題と対応

秋まき小麦：Ａ町の対象者は大豆間作小麦が多いので、特に起生期の適正追肥を重点に活動する。Ｂ町の対象者は、は種が遅くなる傾向があるので遅くても10月10日までには種できる体制と適正は種量の推進を行う。

大豆：本年は追肥提案を参考にして収量が確保できたので、次年度も引き続き300kg/10aを確保できるよう活動を継続する。